

健康健康文化

アダムの憂鬱

高田 健三

人はかなりの年輩になっても、仕事に身を入れてやれている限りでは、少々体が不調なところがあっても、余り気にならないものであるし、ましてやそれが年をとったせいなどと思いたくないものである。私などは、他人がそういうことを話していると、ああこの人はそんな気になるのかななどと、同情はするが、わざわざそれを自分の身に当てはめて考えることはしないことにしている。そんなわけで、今日までの70有余年を「元気そう」にやってこられたとと思っている。「そうに」というのは、私の周りの人からよく、「いつも元気でいいですね」とか、「どうしてそんなに元気にできるのですか」などと言っていただけなので、体の調子が悪いときでも、そんな言葉に逆らってまでどこそこが悪いんですと言うこともないと思って、「ぼつぼつです」とか「カラ(空)元気だけですよ」とか言って、元気そうに應對しているからである。他人の目には元気そうに見えても、私も生身であるからには、人並みに風邪をひくし、学生達とのコンパで飲み過ぎれば二日酔いもする。しかし、もともと苦しそうな表情をするのが得意でない顔つきらしく、人から、どこかお悪いですかなどと、いくばくかの労りをもって訊かれることもない損な質なのである。そのせいか、風邪で熱を出して苦しんでいても、家内にさえも余り同情してもらえない憾みがある。

空元気とは字句の通り、上辺だけの元気なのだが、それでも今日まで人並みにやってこられたのは、そこそこの元気があるということになるのであろう。年寄りが元気にしていると目立つらしく、よく元気の秘訣は何ですかと人に訊かれることがある。昨年、卒業生のグループコンパの時、一人の男子学生から訊かれたときは、いささか虚を衝かれた感じがした。そこは賤の言葉などといって、何事にも興味を持つことだと答えたが、要するに「好奇心」が人一倍旺盛なのである。対象の貴賤を問わず、アカデミックから市井の下世話なことまで、事柄の内容にはこだわらない。世間ではこれを雑学と呼ぶが、読むこと、見ること、聴くこと、食べることから、アスリートとまではいかないが、体を動かすことまで何でも興が向けば調べたり試したりしてみる。乱世の今日、肩を張らず人生を楽しめるのはそのお陰と思っている。つまり好奇心は私にとっ

ては心身両面の保健薬みたいなものなのである。

この9年間、文科系大学で自然科学関連の授業を担当してきたが、20歳前後の学生諸君には少なからず悩まされてきた反面、彼らの「生態」を知るよい機会でもあったと思っている。そのせいか、彼らとは50年前後の落差があるにも拘わらず何とか共通の話題を持つことが出来たのは大きな収穫である。ところが、彼らに言わせると、一年入学年次が異なると、ものの考え方が違って、余り付き合わないという。如何に日進月歩の科学文明の今の世であっても、人間の思考がそんなに早く変化するとも思えず、意外に若者の間に断絶があることを知った。

また同年次の学生の間でも、男子、女子それぞれ別のコロニーを作る傾向が強く、教室の中では女子学生が前列の机を占める割合が多い。将来の人生設計など、男子に比べ女子の方が比較的はっきりしたイメージを持っているように私には思われる。彼らのライフスタイルを見る限り、キャンパスは女性優位の世界のようである。人類最初の男と女、アダム(語源はヘブライ語の人、男)とイヴは、原罪を犯してエデンの園を追われるが、初めにその禁断の木の実を食べたのはイヴであり、これを知ったアダムが追従し、運命を共にするというのは、ミルトンの「失楽園」のストーリーである。人間の歴史の初めは、かくして女性によって作られたのであれば、女性優位は今に始まったことではなさそうである。

最近、十数年来小学校の先生を務めている女性教師から聞いた話には、50年近く大学教育に関わった者として、我が国の初等教育現場についての知識の欠落を思い知らされた。男女同権になって久しく、教室で男児と女児を隣り合わせで着席させていたのは過去のことで、今は児童をジェンダーレスの、つまり、男女の性のない集団とみなして、アイウエオ順に着席させるという考えになっているという。教育の現場に、男女の意識差を持ち込まないことが、児童自身にも、教師の立場からも望ましいという理念かららしい。古きの時代の「男女7歳にして席を同じゅうせず」という中国の古い道徳に由来する幼児教育観などはとんでもないことなのである。教育学は専門ではないので、現代教育の因ってくる所は知り得ないが、社会における男と女の存在意義は、いつ、どこで教えたら良いことなのだろうかと思う。その上、教育現場の先生の仕事はなかなか大変なものだと思ったのは、先生達自身も、男女平等の立場から、肉体労働を伴う仕事も男性教師と同等に分担することになっているという。家事・子育てもある女性にとっては相当の重荷である。

このことで思い出されるのは、アメリカにいた頃のハプニングである。家内

はもともと私より体格がよい(?)ので、結婚当初より、力仕事は家内がすることに暗黙の了解が出来ていた。そんなこともあってスーパーマーケットに買い物に行くと、重い物はいつも彼女が運ぶことになっていた。ある日、いつもの通りに買い物袋を抱えて駐車場を歩いていた所、突然中年の女性が駆け寄ってきて、すさまじい剣幕で叫びだした。「お前は男のくせに、女に重い荷物を持たせるとは何事だ。我々女性を侮辱している」ということであった。大声なので辺りの人の注目も引いて、何と言っているか言葉に窮してしまった。そのときはたまたま面白くないことでもあった女性につかまった位に思って余り気にしなかったが、後日また同様な目にあってしまった。研究室のアメリカ人にこのことを話すと、男女平等とはいっても、男と女のすることには自ずと違いがあるのは当然で、虫の居所が悪かったにせよ、力仕事は男がすべきという彼女の抗議は正論であると片目を瞑って見せた。まことに当然のことであるが、何事も画一的に行かないのが人間社会である。私達夫婦の場合は、全く自然の成り行きでそうになっているまでであるが、それをいちいち説明することは大変である。その後は、軽くても嵩張って大きく見える荷物を私が持つようにして女性からの攻撃を逃れることに苦労した。

力仕事での女性優位(?)は我が家の場合、平和の基本なのである。男女平等という立場から何事も機械的平等にしなければならないという考えは、我が国の男女同権意識は、未熟と言うべきか進んでいると言うべきか。最近では、家庭持ちの男性に家事・育児休暇を取らせる制度ができたというから、夫が「家政夫」として妻をバックアップする姿があちこちで見られるようになるのかもしれない。そうすると、近未来の社会はますますジェンダーレスになり、男女の差が存在するとすれば、子孫を残すという生物学的性差のみに限られることになる。

ところが最近の新聞記事によると、環境ホルモンのせいで、世界中の男性の生殖能力に低下の徴候が見られるという。人類は文明という名のもとに、数多くの化学物質を創り出したが、それが環境に排出された後、巡り巡って人間の体内に摂取され、ホルモンの作用によって男性生殖腺の発育を妨害するためだとされている。もしそうだとすると、人類が今の文明生活を享受する限り、環境ホルモンの蓄積が進み、男性の地位は生物学的にも弱っていくことになりかねない。どうやら男性の「軟(男)弱化」は止められそうにない。「男子一度家を出ずれば7人の敵あり」といった、かつての戦う姿勢の男性像は最早甦らないのであろうか。

以前からよくある質問に、あなたは今度生まれるときは、男性がいいか女性

がいいかというのがある。最近、A新聞社が行ったこの種の調査の結果は大変に面白い。1980年から1997年の間に、男性は今度も男に生まれたいというのは90%から87%に僅かに低下しただけであるが、女性の場合、男に生まれ変わりたいというのは42%から32%に顕著に低下し、それに反して、今度も女に生まれたいとするのが53%から63%に増加しているのである。これをどう見るかは人によって異なるであろうが、男性の男性たることに対する自信の無さが窺えるのに対し、女性は女性として生きることには自信を持ち始めたことを示すものと言える。事実、女性の社会進出がますます進み、いわゆるキャリアウーマンの活躍が目立つようになったが、結婚しない女性、つまり、社会生活の上で男性を必要としない非婚女性が増えている現実がある。一方、離婚の多いアメリカでは、離婚した妻から子供の養育費をもらって、子育てをする男性がいるというテレビ特集をやっていた。文明社会の究極はジェンダーレスなのか、社会学者に訊いてみたい問題である。

アメリカでは以前からバスの運転や地下鉄の運転など、心身共に負担のかかる職業にも、女性が進出していたが、最近、我が国でも、トラックの運転や、建築の現場業務に活躍する女性が出てきている。不況の今でも男性は依然として「3K」の職種を敬遠すると言われるが、何にでも挑戦する女性が増えてきたことは、この先、男性の活躍する世界を狭めることになるのは間違いなさそうである。私の知人の一人娘さんは航空工学科に入学したし、土木工学を勉強している女子学生も知っている。離婚の時の「みくだりはん」(三行半)も、今や女性から突きつけられる場合が増えているという。ギリシア神話の中の、好戦的な女戦士軍団、アマゾネスが今の世に甦るとは思えないが、女性の攻勢は今後もしも止むとは思えない。女強男弱の世の中になるよりジェンダーレス社会は、むしろ男性にとって好ましいものになるのかもしれない。今年もまた、卒業生が社会に散っていく。男子学生の表情は心なしか、生彩がないように見えるのは思い過ぎか。現代のアダムの憂鬱は当分解消しそうにない。

(名古屋大学名誉教授)